衣のNGO
ふるぎのゆくえをおいかけて
JFSA
やたかなくらしをささえる
せかいのまずしさをかんがえる

NPO 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001 千葉市中央区都町 3-14-10
TEL/FAX:043-234-1206
E-mail jfsa@f3.dion.ne.jp
URL https://jfsa.jpn.org

会報60号 2023年1月

↑お父さんはバスの運転手　技術訓練コースの生徒の工場見学にレンタルしたバスで

◆◇JFSA ホームページ
Facebook インスタグラム ページもごらんください◇◆

JFSA HP　JFSA Facebook　JFSA インスタグラム

パキスタン派遣報告

依知川　守

派遣期間：２０２２年
11月15日(火)～22日(火)
派遣員：豊島　洋(理事)　依知川　守(事務局)

以下、派遣目的に沿ってご報告します。

1．アル・カイールアカデミーの教育事業の確認

【本校、各分校、カレッジなどの様子】

・本校や分校は、年２回行なわれる全国統一試験の最中で、生徒同士が距離を持って着席するために半数ずつ登校していました。学校の運営は通常通り行なわれていましたが、インフレ（２０２２年７月には25％）による物価高で生活が厳しくなっており、学び続ける事が厳しい生徒も増えているそうです。

・第４分校は周辺地域の開発によって立ち退きをせざるを得なくなり閉校されました。開発は、カラチ郊外のスラムを含む地域へ拡大している様子で、通行する際は入り口で身分証明書の提示などチェックが必要でした。

↑登校日をまちがえて来た生徒たちが自習中

・第７分校は借りた建物で運営していたのですが、契約を継続できずに閉校されました。

このスラム地域はカラチ市内でも特に厳しい生活環境であり、子どもの数も非常に多いそうです。ムザヒル校長は子どもたちの環境についてこう話していました。

「パキスタン社会では子ども達の環境は

①エリート
②ミドルクラス
③ミドルクラス周辺のスラム
④スラムの中のスラム
⑤郊外

の５つに分けられます。私はこの中で④に暮らす子どもが一番危険だと考えています。何故なら子どもたちはスラム以外の社会との接点を持つ事ができず、マフィア政党や、宗教グループに洗脳され、彼らに使われてしまうケースが多いのです。若者たちは周囲から頭を下げられる事を、人々からの尊敬と思い憧れを持ってしまいます。グループ間の衝突により命を落とす若者がいる事はとても悲しいです。条件さえ整えばこの地域でも分校を再開したいです」。

・「青空学校」（２００５年北部地域の大地震被災地で開かれた）は、現在休校しています。

この学校は、被災地出身であり、学校や事業グループの事務局を務めてきたカユーム氏が村人とのパイプとなり継続してきました。

しかし、カラチのスラム地域とは異なる環境下での教育の場作りに対して、アル・カイールは運営に注力できず、一旦休止する判断をしたそうです。とはいえ現地の山岳地帯は、高低差の厳しい環境下にあり、教育にアクセスすることが困難な子どもも未だにいます。

↑青空学校（休校中）のある山間地

カユーム氏は、いずれ青空学校を再開したいと話していました。

・第８分校（女子校）に初めて訪問することができました。分校の前の建物ではコンピュータークラスが準備中で、近い内に授業が開始される予定です。

校内には、生徒と先生が協力して作った、女子教育の必要性を訴えるポスターが掲示されており、試験を終えた生徒たちが遊具を使って遊ぶ姿がありました。

↑右端がユスラさん　コンピュータークラスの教室

・技術訓練コースは今年新たな先生を迎えて再スタートしました。縫製（近隣の女性が対象）と空調（主にアル・カイールの男子卒業生が対象）のコースがあります。縫製コースでは、手回しミシンの初級と機械式ミシンの上級の２段階で学んでいます。女性達が内職をする上で必要な技術を身につけられるだけではなく、スラムでは女性が一人で外出する事自体が困難な状況がある中で、女性同士が集う場になっているようです。

空調コースでは基礎を学ぶ講義と、実際に機器を分解して実技が行なわれており、皆熱心に学んでいました。

・コンピュータークラスは、現在本校と第３分校（１～８年生）、カレッジにあります。自分で簡単なプログラムを入力するとアニメーションが動くソフトも使い、生徒が楽しく学べる工夫がされていました。講義と実習で５人の先生がいます。主任のユスラさん（22歳）はアル・カイールの卒業生で、カラチ大学の１年生です。彼女は既にアル・カイールで２年間働いており、その給料で大学へ通っていると話していました。最近は就職でコンピューターの基礎的な技術が必須な場合も多く、他の分校でもクラスの開設を予定しています。

↑空調コースで実技を学ぶ

・カレッジは、現在生徒数約２００名。アメリカに暮らすパキスタン人医師のＮＧＯによる奨学金制度により、今年も半数くらいは大学進学できる見込みです。
・アル・カイール医療センターは、カレッジの１階部分で運営されており、７名の医師が働いています。患者数が増えて手狭になってきているため、別の場所への移転を準備しているそうです。

2. 古着販売事業についての確認

【ＡＫＢＧからＰ＆Ｊカンパニーへ古着販売の事業主体を移行】

ＪＦＳＡはこれまで現地の人々と相談を重ね、ＡＫＢＧ（アル・カイール事業グループ）から、カユーム氏を代表とするＰ＆Ｊカンパニー（以下ＰＪＣ）へ古着販売事業の主体を移行することを決めましたが、今後の連帯事業のあり方について再確認しました。２０２２年９月の輸出コンテナから、輸入、販売はＰＪＣが担っています（現地コンテナ到着の記事を参照）。パキスタンへの海上運賃が９月から大幅に値下がりしたことは良いニュースですが、女性用衣類などの現地で販売価格の低い品目については、ＰＪＣと協力して別の国への輸出などを検討しています。

【現地古着マーケットの様子】

・日曜バザールでは、時期的に冬物を中心に売られており、古着も中古のベッドシーツも「２００ルピー（約１２０円）だよ！」と声が飛び交っていました。価格は交渉で決まるのですが、大体は３割引位になるようです。ＰＪＣ代表のカユーム氏によると、ここ数年パキスタンの市場には中国から安価な古着が大量に輸入されていましたが、品質が悪く売れないという理由で需要が以前より減っているそうです。

3. アル・カイール福祉協会が行う大洪水の被災地に対する支援活動の様子と今後の方針の確認

【被災地への同行】

・アル・カイールアカデミーは、現地で寄せられた寄付金を元にこれまで数回、緊急支援として被災地で食料やテント、蚊帳、布団などの配布を行ない、またボランティア医師の協力を得て医療支援も行ないました。
今回はアル・カイールが支援活動をしてきた２つの地域を訪問し、食料と布団の支援の現場に立ち会い、村人の生活調査に同行しました。事前に整理券を配り、各家族に食料５００袋、布団５００枚を配布しました。
被災地の町、ハイルプール・ナサン・シャーの田畑は現在も２～３ｍ水没しており、ポンプで水を汲み出していました。住民は皆農民や肉体労働者で、住む場所も仕事も失い、備蓄していた食料も洪水で流されてしまったと話していました。この地での生活を諦め、ハイデラバードやカラチへ避難した人もいるそうです。

↑被災地の緊急支援　布団を配る

メヘルから先の村へ・・・本来は田畑ですが、今はまるで巨大な湖のような状態の地域を、船に乗り換え移動しました。島のようになってしまった集落で、住民に話を聞きました。「６月から２ヶ月間毎日雨が降り続き、川の水位が大きく上昇しました。８月20日、隣の町の堤防が決壊したと聞き、私たちは家畜を連れて最低限の家財を担ぎ、１日で避難するしかありませんでした。政府からの洪水警報などは一切ありませんでした。この大洪水で、村では、６名がマラリアや高熱などで亡くなりました。また、１００頭位の家畜が死にました。生き残った家畜も、与える餌が手に入らず、安く手放すか屠殺するしかありませんでした。２０１０年の大洪水では、この地域の被害は水深３ｍ弱程でしたが、今回は4.5ｍ近くまで増水し、水は堤防を大きく越えてしまいました。これまでアル・カイールから数回の食料支援を受け取り、とても助かりました」。

↑水没した農地を船で移動する人々

政府は当初、テントや食料を配ったそうですが、住民は「有力な政治家のいる村への支援が優先され、支援物資がマーケットで売られている」とも話していました。
別の被災地、メヘルでは住民の家や田畑は完全に水没しており、道路上や堤防の上に避難してテントで暮らしていました。以前は３ｍ以上あった水深は1.5ｍ前後まで引いているそうですが、場所によってはもっと深いそうです。

↑道路のテントで暮らす家族　両脇の農地は水没している

【アル・カイールアカデミーによる被災地支援の今後】

被災地訪問から戻り、アル・カイールの理事会では今後の支援の方向について話し合いました。
「これまでは食料や物資を配る支援を継続してきたが、食料や物資の配布は既に他のＮＧＯや国際機関も行なっている。住民の強い要望もあり、今後は家屋の再建の支援が必要だと考える。家屋の再建は費用が嵩むが、被災者に相談したところ協力（資金、人手）の申し出もあった」
「多くのＮＧＯが食料配布を行なうのは、必要性があるからだけでなく、活動が分かりやすくお金を集めやすいということも理由だろう。家屋の支援をするＮＧＯもあるが、過去には中間業者によってピンハネされ、粗悪な建物になったという話も聞く」
「まず家屋の再建支援を着実に行ない、将来的には被災者と相談しながら農業の再開の支援も検討したい」
「２０１０年の支援には、アル・カイールの生徒も参加した。都市に暮らす生徒達は、いかに食料を得るか（買うか）は考えるが、それらが作られる過程を知らない。都市部のスラムの住民も、元々は農民だった人々が仕事を求めて移住したはずだ。２０１０年に生徒自身が活動に参加したことは、農民の暮らしの理解へと繋がった。今後の支援活動の中でも、生徒の参加を実現したい」
理事会では、具体的な喫緊の課題は住む場所の再建であること、またその支援活動にあたっては、２０１０年の洪水被災地支援と同様に地主の了解をとり、被災者自身の参加、協力を得ながら進めることを確認しました。

【ＪＦＳＡによる協力】

・ＪＦＳＡとしては、２０１０年のパキスタン大洪水の際に行なった支援の際に寄せられたカンパ金の残金（約３００万円）を現地へ送金し、被災地の支援活動のために使うことを決定しています。今後もアル・カイー

ルアカデミー理事会と支援の状況を共有し、現地の活動に協力します。

【派遣後の報告】

・アル・カイールは被災地のブンド村にモデルハウスを1軒建てました。約4 m四方の1部屋とキッチンがあり、これを1家族用と考えています。実際に建てることで、1軒あたりに必要な資材や人手、経費を確認することが目的です。今回は20万円弱で建てられました。住民から資材(倒壊した家のレンガなど)の提供や人手としての協力の申し出もあり、彼らは元の家の直ぐ側でテント暮らしをしているため綿密な相談や確認ができます。

↑被災地に建てたモデルハウス

【卒業生インタビュー】

11月19日(土)アル・カイール本校にて

ウンズィーブ・リズワーンさん16才

(アル・カイール本校のコンピューターコースへ通っている)

同居家族：両親、本人、弟(15才)、妹、弟3人、お父さんの弟の家族

仕事：父親は結婚式のドレスの刺繍、母親は主婦、

　　弟は車やバイクのパンク修理

ウンズィーブさんはナーサリー(幼児)クラスからアル・カイールに通い、マトリック(10年生で受ける大学入学資格検定試験)をパスするまでは、学校の直ぐそばに住んでいました。3年ほど前、お母さんのお姉さんが亡くなり、母と妹と下の弟達はハイダラバードへ行き、2ヶ月半位学校を休みました。アル・カイールに相談せずに休学していたため、結果的に辞めることになってしまったそうです。現在、妹と弟二人は公立学校に通っていますが、教師が上から一方的に教えるような形で、妹や弟が楽しく学べていないと感じています。アル・カイールの授業は生徒自身が考える力を身につけられるので、1月からは妹や弟をアル・カイールに復学させたいそうです。

今年、家族は祖母の世話のため、ユスフゴート(近隣のスラム地域)へ引っ越しました。家からアル・カイールまでは片道リキシャで15分、30ルピー(約18円)かかります。弟の1人はアル・カイールの幼稚園クラスに通っていますが、行きは父がバイクで送り、帰りはウンズィーブさんが連れて帰っています。

「現在コンピュータグラフィックスの会社で働いています。月給は4000ルピー（約2400円）です。この仕事をとても気に入っています。学校のコンピュータークラスは以前よりとても内容が充実しています。私は学校や職場でもっと動画編集の勉強をして、いずれは結婚式の動画撮影や編集などをしたいです。」「マトリックをパスして一旦学校を離れ就職したのは、家族のために稼ぐ必要があったためです。いずれアル・カイールのカレッジへ進学したいです。」とウンズィーブさんは話してくれました。

パキスタンへのコンテナ送り出し・到着報告

「第79回コンテナ送り出し」

2022年9月29日積み込み

積み込み重量：25,280KG

コロナ禍以降、コンテナの運賃が高騰し大きな影響を受けてきましたが、今回は運賃が大幅に下落し経費が下がりました。先行はまだ不透明ですが、ひとまず事業的には明るい材料となりました。

「第79回コンテナ到着」

第79回コンテナは、新たに設立したP&Jカンパニー（以下PJC）に輸出する第1回目となりました。PJC代表のカユームさんにコンテナ到着やPJCについて聞きました。

〇コンテナは無事に到着しましたか？

はい、卸業者ニアーズ氏の倉庫で11月30日に荷下ろしを行ないました。PJCとしての輸入は初めてでしたが、特に問題はありませんでした。

〇コンテナの販売見込みはいかがですか？

ニアーズ氏とは卸売価格を決める交渉を行なっていて、1KGあたり130ルピーと提案されています。PJCとしては経費を差し引いて、50万ルピー程の利益を得られると見込んでいます。

〇パキスタンの古着市場の現況を教えてください。

現在は停滞気味ですが、物価が上がって衣料品も値上がりしているため、古着を選ぶ人が増えてきています。

〇今後のPJCの展望を教えてください。

小規模でスタートしましたが、将来的には倉庫や店舗を構えてスタッフを雇用したいです。古着輸入はJFSAとグリーンコープだけではなく、輸入先を増やせるようにしたいです。JFSAへパキスタン物産を輸出する事業も拡大したいです。PJCの事業目的は子どもたちの利益(教育の機会)を作ること、私は事業を推進してその目的を達成したいと考えています。

〇古着を出している日本の人たちにメッセージをお願いします。

まず、JFSA、グリーンコープ、ハンサリム生協（韓国）の皆さんへ感謝をお伝えします。

1着の服は1つのコンテナに相当する程の存在だと感じています。何故なら皆さんが「子どもたちの支援」という目的のために努力していて、皆さんの努力そのものであり、単なる1着の服ではないからです。この活動を更に大きくするために皆さんとの協力関係を深め、子どもたちのために役立てたいと思います。

←コンテナ積み込み　終了後の集合写真

↓卸業者ニアーズ氏(左)の倉庫に荷下ろし

「もしもし」

田邉　航太郎

「モシモーシ。オアヨウゴザイマース。ゲンキデスカ？」

ほぼ毎日、日本時間の午前11時から午後1時の間にかかってくる、P＆Jカンパニー（PJC）代表カユーム氏からの電話です。パキスタンとの時差は4時間なので、現地では午前7時から9時の間になります。チャイをすする音が聞こえることも多く、出勤前の朝食時にかけてきているようです。

内容としては世間話なども含めた近況報告ですが、お互いの事業の話がほとんどです。いわゆる「ほうれんそう」を交互に行なっています。お互いの現状を確認し、今後の予定を立てていきます。自分たちの名前にある通り、「連帯」するうえで必要なことだと思っています。上下関係ではなく対等な関係でと思ってはいますが、事業的な規模の差や送る側と受ける側の違いもあり、こちら側から指示することが多いように思います。その際は「おひたし」で返すことを忘れずに、です。

彼の現状としては、アル・カイールビジネスグループ（AKBG）から引き継いだJFSAからの古着輸入や、縫製工房で行なっていたカルハナ事業、パキスタン物産などを輸出する事業を主に行なっています。もともと勤務していたアル・カイールでの業務から完全に離れたわけではないので、そうした仕事も行なっています。自分とは主にカルハナ事業や、物産を輸出するための現地での仕入れについて話をしています。

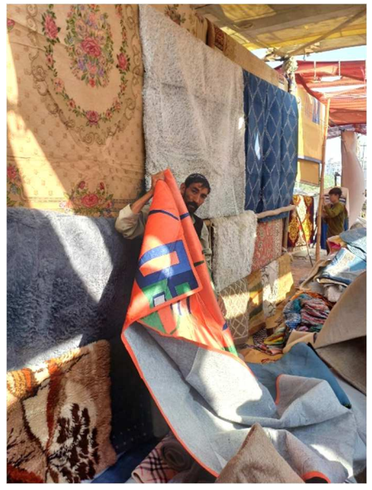
そんな彼が仕入先であるバザールや卸売業者の倉庫から商品確認のために自分と電話をするときに、「モシモーシ」と大きな声で話し始めるので、最近そのあたりを歩くと『モシモシ』と呼ばれるようになったとあまりうれしくなさそうに言っていました。

こちらからの現状としては、彼を通じて得た商品の販売状況や、注文などの今後の見通しが主ですが、成績があまり良くないのであまり良い報告ができていないです。何事も軌道に乗るまでは試行錯誤の繰り返しだと思っています。事業の主体を担うPJCとの仕事はやりがいがありますし、責任も重大だと感じています。

そんなPJCとの事業を進めていくために、現状成績が良くない一番の理由は人手不足です。東葛センターではただいま絶賛スタッフ募集中です。この場を借りて皆様にもぜひお声掛けさせていただきたいと思います。

「モシモーシ！イッショニハタラキマセンカー！」

→PJC代表のカユームさん



←バザールのカーペット屋さん

「みんなと同じ年の子たちもいるよ」

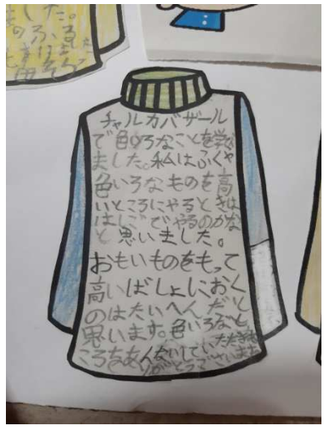
入江　賢治

10月5日、千葉市中央区都町にある「都小学校」から、今年も「都町の町たんけん」という校外学習で、小学2年生が15人程訪れましたJFSAでは受け入れを始めて5年程になります。

子どもたちはグループに分かれて、店舗「チャルカバザール」と倉庫内を順に見て回ります。普段考えていないような質問も出てきます。ある子どもから「服は全部で何着ありますか？」と聞かれ、「倉庫に30トン服があるとすると、15万着ぐらいかな…。正確には分からないけれどとにかく沢山あるという事ですね！」と答えるしかありません。子どもの背丈よりもずっと高く積まれた服の山や、15万着という数を聞いて「服がこんなにたくさんあることに一番驚きました」という感想が多かったです。

続いて、なぜたくさんの服がここに集まってくるのかな、という話をします。「パキスタンでは家が貧しいために働いている子どもがたくさんいること、その子どもたちのための学校があること、その学校が続けられるように日本とパキスタンで服を売ってお金を作っていること」を伝えます。小学2年生には分かりづらい内容かもしれません。反応はそれぞれ違って見えます。「学校」と聞いて、学校は好きじゃないなぁ、という子もいたかも知れません。次に「みんなと同じ年の子たちもいるよ」と伝えると、子どもたちの表情が変わります。「パキスタン」という遠い国の子どもの存在が、同い年だと聞いて自分との距離が急に縮まるのかもしれません。「同い年なのに何で働いているの？」「何でそんなにお金がないの？」と疑問が出てきます。湧いてきた「何で？」という疑問をこの先少しずつ考えていってもらえたら、と思います。そして、その子どもたちを応援したい、と考えた時には、JFSAに服を出すという方法があることを伝えました。

この日来てくれた子どもたちには「パキスタンという国に同い年の子どもたちがいる」ことだけでも、頭の片隅に入れて置いてくれたらと思います。パキスタンの子どもたちのことを気にかける存在が広がってほしいと思います。都町に拠点を持ち、地域に根ざして活動を続けるにあたり、小学校との交流で子どもたちが知る機会を作れる事はとても大事です。これからも繋がりを紡いでいきたいです。



→←都小学校の子どもたちから届いた寄せ書き

一枚の服ができるまで。前編

kar-khana 事業担当　佐々木　貴弘

これまではおもに縫製工房とのやり取りや働くスタッフの紹介などをしていました。しかし先日の総会で皆様からのご意見やご質問をうけて、商品をつくるまでの工程をお伝えできていなかったことを痛感いたしました。あらためて今号と次号では、一例ではありますが、商品が完成するまでの流れをご紹介させていただきます。

1. オーダーした服などの元ネタを用意する。

服をオーダーするときにサンプル作成は必須です。幸い JFSA は国内・国外から多種多様な服が集まる環境です。見渡せば商品作りのヒントがたくさん転がっています。このデザインが面白い。パーツが多いものや凝ったデザインの服はとても魅力的だけれど、いまの縫製工房の技術ではちょっと厳しいかな。時にはチャレンジ枠として、少し技術が必要な服を選ぶこともあります。

2. 元サンプルをパキスタンの縫製工房に送って、サンプルを作ってもらう。

縫製工房に残っている残布を使ってサンプルを作ってもらいます。元サンプルを送るときにはそれぞれに指示書を同封します。あくまでも出来上がったカタチをイメージするものなので、ボタンや生地の指定はこの段階ではしません。指定をしてしまうと、何故かこちらの指示を待たずに作り始めてしまいます（まだ正式なオーダーではありませんと伝えているのですが…）。

3. 出来上がったサンプルを確認する。

ハンカチなどの小物類は平面なので、サイズの確認ができればそれほど問題はありません。しかし、服に関しては写真では判断ができません。そのため、必ず現物を日本に送ってもらってから、自分の目でみて確認。着てみて確認。別注のものはお客様とともに確認をします。変更を加えたい場合は、その変更箇所を工房側に伝えます。このときに一番危険なのが、「ちょっと小さく」とか「少し長くして」という漠然とした指示です。工房の担当者は基本的に「OK」と答えるのですが、「ちょっと」や「少し」は人によって基準が変わるので、必ず「何 cm 小さくする」「ポケットは肩から何cmの位置に変更する」というように具体的に伝えます。変更することが可能かどうかをいったん確認した後に、問題がないのであれば生地やパーツの選定へと進みます。

次号に続く

←サンプル　伝統的な刺繍入りのジャケット

kar-khana

第20回定期総会報告

2022年11月28日(月)に第20回定期総会を行ないました。出席総数は121名(本人出席31名、委任状出席58名、書面議決書32名)で、議案(左の5つ)はすべて承認されました。

1、2021年度事業・活動報告
2、2021年度決算報告・監査報告
3、2022年度活動方針・予算案
4、役員の選出に関する件
5、定款の変更に関する件

2021年度の活動の概要（2021年10月～2022年9月）

●回収とアル・カイール事業グループ（以下AKBG）への送り出し　回収量は119．8トンで計画の約92％でした。会員・支援メンバーの方からは延べ1566人（約12トン）の参加がありました。

AKBGには5回の送り出し（合計124．5トン）を行ないました。コンテナの海上運賃は高騰した状態が続き、収支が赤字となった分についての対応をAKBGと協議しています。回収したものを有効活用するために、AKBG事務局のカユーム氏と一緒にタイの古着市場調査を行ないました。

●AKBGとの事業連帯の推進とアル・カイールアカデミーの自立支援

連帯事業を発展させるためにAKBGと話し合いを重ね、パキスタンで古着販売事業に専念する体制づくりの取り組みとして、P&Jカンパニーが設立されました。代表は、AKBG事務局のカユーム氏になりました。

パキスタンからの輸入古着の販売は、柏店ではインターネット販売も活用し、売り上げは2倍以上になりました。

縫製工房製品販売は、受注数・依頼数も増えて予算を達成しました。

●国内事業

①センター業務

・千葉センター　事業計画に連動し、優先順位を確認しながら作業をすすめました。選別や軒先市、送出しを団体の協力で行ないました。

・東葛センター　不使用のものを整理し、倉庫内の環境づくりにつとめました。選別協力団体が状況に応じて参加しました。

②ショップ販売

・千葉店　CHRKHA BAZAAR（チャルカバザール）

売上目標を達成できませんでしたが、インスタグラムの活用などで子ども服の利用が前年比139％に増えました。

・柏店　kapre（カプレ）

継続的な情報発信でオンライン販売の売上増につなげました。業務用洗濯機を導入し作業時間が短縮できました。

・街商販売（フリーマーケットなど）

徐々に大型のフリーマーケットやイベントなども開催されるようになり、会場を絞って出店しました。

・販売協力団体　二つの団体で回収への協力を呼びかけました。

・市民活動と連動した企画　三つの協力団体の企画に参加しました。

●広報活動と会員の参加

会報3回、回収案内3回を発行しました。個人1439人と19団体の皆さんが会員として活動を支えました。コンテナ積込み、発送、選別、販売などにボランティア参加がありました。協力団体の企画でオンライン報告会を実施しました。

●研修

黒崎卓さん（一橋大学経済研究所所長）に講師をしていただき『パキスタン経済・社会を見る視点』をテーマに事務局研修を行ないました。

●多様な団体との交流

団体会員はじめ協力団体などから回収やコンテナ送出し、オンライン報告会などに協力をいただきました。

●アル・カイールアカデミーの教育・連帯事業に関わる人々との交流

招日と派遣は計画しませんでした。オンラインで連絡を取り合い、お互いの状況や洪水被災地の支援状況について共有しました。

●危機管理の充実

安全管理に努め、新型コロナ感染症予防対策を実施しました。

●業務について

業務量に対して人手不足の状態が続きました。新しい就業規則は作れませんでした。

総会に参加された方たちからは、「地域の人々にもっとリユースの店を知ってもらいたい」、「次のステージをどうしていくか」、「シニア世代の活用も考えたい」、「あと何人スタッフを増やすか」、「電磁的方法の活用は良い面ばかりではない」、「若い人の参画が重要になる」、「AKBGはなくなるのか」などの意見や質問が出されました。

午後の交流会「JFSAの始まりを振り返りこれからを考える～設立メンバー西村光夫氏を偲びつつ」では、設立のきっかけとなった東葛地域での人の出会いとつながり、アル・カイールアカデミーとの出会い、設立に参加、協力した方たちの思いなどを、西村さんの思い出を交えて語っていただきました。

残念ながら時間切れになり、これからを考えるところまで話がすすみませんでしたが、皆さんのお話から、人のつながりが生み出したJFSAの姿が浮かび上がり、今後の在り方の根っこを考える貴重な時間になりました。

監査報告書

私たち監事は 2021 年度（2021 年 10 月 1 日から 2022 年 9 月 30 日）の当会の事業と活動および決算と会計諸表について 11 月 7 日に監査を実施いたしました。その結果、当会の事業と活動は総会の決定に基づいて滞りなく遂行され、決算と会計諸表は法令および定款に従い適正に処理されていることを確認いたしました。

2021 年度は、古着類の回収実績は年度計画の 130 トンの計画に対し約 120 トンの実績で計画を下回りました。回収量の 8 割強は協力団体によるものです。コロナ禍での「協力団体の情宣・広報活動」の成果です。回収は 3 回行ない、参加者はのべ約 16,800 人でした。前年に比べ約 2,000 人減少しました。国内全般の古着の回収率は前年の 8 割程度になっている情報もありますが、コロナ禍でも安定して多くの方に協力いただけるようコロナ禍での広報手段、参加方法の構築をさらに進めていくことが大切です。

前年度からの回収在庫 2 回分も含め計 5 回の輸出は計画どおり行なうことが出来ました。送り出しの量は 125.5 トンとなり計画していた 120 トンをこえました。この先もコロナ禍の影響を受けることが予想されます。新たな回収品目の取り組みや、広報、回収手段をさらにブラッシュアップし回収量、参加人数の増加、計画を達成できるように取り組んでいただきたいと思います。

販売事業では、売り上げは予算を達成することができませんでしたが、来店数は前年並みを確保することができました。SNS の活用、品ぞろえや陳列の工夫をすることで 30 代 40 代の女性の来客が増加しました。国内古着全体の売り上げが横ばい状況の中、子ども服は前年との比較で約 4 割増の売り上げになりました。Instagram、Facebook、Line 等を活用した情報発信、広報が成果をあげています。これからも継続して利用いただけるアイテムの拡充や新たな客層の来店増につながる仕組みづくりにさらに取り組んでいただきたいと思います。

事業全体では 8 期連続黒字を達成することが出来たことは大いに評価されるべきだと思います。また、コロナ禍において JFSA の活動に共感いただく方も多く、個人の会員・支援メンバーはともに増加しました。会員・支援メンバーの増加は活動支援の輪の広がりでもあります。今後も会員増を目指す広報の取り組みを積極的に行うことをさらに期待します。

回収、販売、イベント等の案内を中心にホームページや Facebook を活用し情報発信しました。定期的な更新もなされ活動内容の発信はされていますが SNS を中心とした新しい情報発信は大きな可能性を秘めています。今後も研究いただき情報発信に取り組んでいただきたいと思います。

昨年度に続き 2021 年度も新型コロナウイルスの感染防止対策によって多くの活動に影響がありました。ポストコロナでの回収・販売方法の構築や交流活動の実施等が継続の課題です。更なる創意工夫に期待しています。

JFSA の活動の「価値」がさらに共感を得て広がることが出来るよう、役員、職員、会員の皆様や団体会員・支援メンバーの皆様一丸となって活動計画の達成に邁進いたしましょう。

2022 年 11 月 7 日
監事　水谷　靖之
熊谷　浩二

■□2022 年度（2022 年 10 月～2023 年9月）の正会員・支援メンバーを募集しています

NPO 法人 JFSA の会員は次の2種類です。

1. **会員（正会員）この法人の目的に賛同して入会した個人または団体**
2. **支援メンバー　この法人の目的に賛同し、賛助の意思を持つ個人または団体**

【2021 年度　正会員　個人：172 名・団体 11　支援メンバー　個人：1267 名・団体 8】

会員・支援メンバーの方には、会報（年3回）、古着の回収のお知らせ（年3回）、サポーターグッズ（年1回）をお送りします。正会員の方には総会議案書（年1回）もお届けします。

●年会費（10 月～翌年9月末）

個人：会員 5,000 円　／　支援メンバー2,000 円

団体：会員 50,000 円　／　支援メンバー　10,000 円

●会費振込み口座（郵便振替）

番号：00160-7-444198　口座名：JFSA

※活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。

通信欄に「寄付」とお書き添え下さい。

◆JFSA の会報のバックナンバーをご覧いただけます◆

ホームページのトップページ中央

「JFSA のニュースレター（会報）」より

お進みください。ご希望の方には郵送もできます。

◆会報についての感想やご意見をお気軽にお寄せください◆

JFSA までメール・お手紙でお送りください。

jfsa@f3.dion.ne.jp

こちらの QR コードを読み取っていただくとメール作成画面になります。